

---

# IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; ~ 時ヲ越エテ ~

八雲 虚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## 0話 始まりの音（前書き）

どうも初めまして、シオンと言います。

ISの原作をもとにすすめていき、かなり話の内容を変えてしまう  
かもしれません。

文筆は、全くありませんが、よろしくお願いします。

## 0話 始まりの音

薄暗い部屋

カタカタカタカタカタ

室内には、キーボードを打つ音が響いている

「と~~~~も~~~~く~~~~ん~~~~」

後ろの方からそう呼びながら女性がやって来た

「なにかよう？たばねえ」

「イエース！えつとね、ともくんにお願ひしたいことがあるんだよ」  
「全力で拒否させていただきます」

と少年は、女性の言葉を速攻で拒否をした

「それは無理な話だよワトソン君、だってもうやっちゃったし」  
「やっちゃったしってなにを!？」

と少年は、女性に突っ込む感じに言いそれまで話ながらやっていた  
キーボードの手を止め女性の振り向くと女性は、自分が持っていた  
紙袋を少年に渡すと

「聞きたくないけどこれは…?」

「制服だよーIS学園の〜」

「……………」

「はあああ!?!」

「だからねともくんにはね、IS学園にいつてもらいたいのだよ」

「東さん、試作機の性能テストしていいかな(。|。#)」

と暗い笑みを浮かべながら右手に刀を出現させて東と言われた人に  
刃を向けると

「わぁー！ぼーりよく反対！！」

「なら、俺が納得する理由を聞かせて貰えますか（怒）」  
とにっこりと笑いながら殺気を出していた

「特に無いよー」

「あはははは…なんかもういいや、たばねえらしい…」  
と少年は、呆れたように笑っていた「いっくんと篝ちゃんもISS学園にいつてるからよろしくねー」

「はいはい、解りましたよ…でいつからですか学園は？」

「明日からだよ」

「ふざけんのもたいがいにしろおおおおお！！」

「がんばっ」

その後少年は、急いで身支度をすませでていった

こうして少年 三月・V・知鷲のISS学園での物語がはじまる

## 0話 始まりの音（後書き）

連載するつもりですがかなり不定期になってしまっかもしねません。

## プロフィール(前書き)

今回は、オリキャラの紹介です。オリキャラの機体が反則的になってしまいました…

## プロフィール

オリキヤラ

三月・V・知鷓

身長 169

体重 53

右目 碧眼

左目 緋眼

髪 銀髪

hackのハセラxフォームみたいな顔で体型です。

目は、目立つのでいつもカラーコンタクトをしている。出生にも色々事情があります。ちなみに束さんなみの天才でもあります。でも、かなりのめんどくさがりやで真剣に何かを取り組むことはあんまりありません。知鷓は、自分が仲間、友達と思う人が傷つけられるとかなりキレます。下手すると死人がでます…（笑）

知鷓はいくつかのISを使いますが一卷分が出てくるのは、一機だけです。

IS名

ブレイカー

装備

鞘つき刀 インフィニティ

大剣 アイナ

究極守護剣 無限

アイナは、大剣、二刀流、直結状態で使用できます

無限は、最大五十本の刀剣を出現させビットのようにも使用できます。無限の出す剣はそれぞれ効果があります。

ワンオフ

## 一瞬千撃

インフィニティーを使用し発動します

鞘から抜かれたインフィニティーは、1分30秒間最強無敵刀になる。

でも、ISを展開したら一度しかつかえません。再度使うには、ISを解除して再度展開しなくてはなりません。ビーム無効などの追加効果

相手に一太刀あてれば相手のシールドエネルギーがMAXだろうがなんだろうが0にしてしまう

威力がかなり強過ぎるため東さんに使用を極力避けるように言われているため使用するにしても威力を3分の一以下で使用している

一話 再会（前書き）

オリ主、叩かれまくりです…

## 一話 再会

正門前

「ここがIS学園か、なんか…変な形だな」  
「なんでこんなへんてこな形してんだ？独創的すぎるだろ…そう思っ  
のは俺だけだろうか。」

「やっと来たか、この馬鹿者が」

と後ろから声が聞こえ、あることが頭をよぎった。  
この口調、いきなりバカ呼ばわりといい、ある人物 よく知って  
いるとある人物と同じような感じなのですが…  
それと、とてつもなく嫌な予感が…

「……………」  
「恐る恐る振り向くと」

「うわぁっ！？関羽!?!」

「パアンツ！叩かれた。すっげえいてえー。」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「すみません、千冬ねえ」

「ここでは、織斑先生と言え」

「はい、解りました」

と俺の姉貴分こと織斑千冬。

「で、なんで遅れたんだ？」

「あのですね、ウサギさんに聞いたの今日の1時ですよ！…ここまで  
くるの大変だったんですよ！」

「そうか、たくあの馬鹿は」

「本当ですよ、機体の調整してる時に…」  
とつかれ気味にいつていると

「それは、後にしる行くぞ」

「はい？どちらえ」

「お前のクラスだ」

「ああーそうですね」

「ハア〜っーか女だらけのところでやっていけんのかな…」

「そっついやあいつも…」

「それよりもあの機体を」

「などとおもったり考えたりしている」と

「パンツ！」

「！？いつてえー！！」

「聞いているのか、馬鹿者」

「えーえー馬鹿者ですよ」

「きいてませんでした」

「はあー、たくお前は、もう一度言っぞ。お前は「一組だ」

「一組ですね、まあ〜どうでもいいんですけどね、はあああ  
と嫌そうにふかいたため息をつく」と

「パンツ！」

「シャキツとしている」

「はい、織斑先生…」

「たく人の頭をなんだと…」

などと思っていると教室の前に織斑先生が止まると

「ここで少し待て、呼んだら入ってこい」

「解りました」

というと教室に入って言った

とゆいより千冬ねえが担任なのか？

しばらくして

「入ってこい」

はあー災厄の始まりがきた

などと思いつつ教室に入ると見知った顔がいた

織斑 一夏と篠之野 箒だった

「挨拶をしる三月」

「はい」

うっなんかいいずれえー

クラスの女子が目をキラキラさせ見てきていた

「ふー…三月・V・知鷗です。趣味は、機械いじりと料理、読書です。よろしく願いします。」

.....

やべえしくったか!?

「ぎゃ……」

「ん?」

「「「「きやあああああーっ!!!!!!!!!!!!!!」」」」

みみいてえー、なんだっーんだ

「男子！しかも二人目」

「かつこいいい！銀髪きれえー！」

「犬みたいでかつこかわいい〜！」

「ペットにして飼いたい！」

な、な、なんだこいつら…

っーか、犬みたいにかつこかわいいってなんだ！

それよりも最後の奴は、危険だ

「織斑先生、ここの人達ってバカですか？」

「そのとうりだ、お前の席はあそこだ」

と織斑先生が指したのは、廊下側の一番後ろの席だった

「解りました」

と言い席に向かった

「SHRは、終わりただ。山田先生授業を」

「はいっ！」

と山田先生が返事をし一時限目が始まった。

一時限目は、IS基礎理論授業だった

一時限目が終わると同時に寝始めようとする

「よっ！知鶴」

「あゝあああ？」

たく、誰だ人の眠りを妨げようとするやつあ

「お、俺だよ…」

「ん？ああー、やあやあいつくん。おっひさあー」  
束ねえ式挨拶、あれ一夏なぜ合掌している？

バキッ！

突如、頭に痛みがはしった

「つつた！？」

頭を殴られ後ろを向くと

「ひさしぶり、ほつきねえ」

「ノノノノつあ、ああひさしぶりだな知鶴」  
なに照れてんだ？

それよりも…

「なんで殴られたんだ」

「お前があの人と真似などをするからだ」

「さいですか」

ん？筈って束ねえとなか悪かったけ？

「知鶴、俺のことわすれてねえーか？」

「気のせいだ一夏、後そろそろ席につ…」

パアンッ！

「さつさと席につけ織斑」

「……………御指導ありがとうございます。織斑先生」

間に合わなかったか…

ご愁傷さま一夏

## 二話 情報流出

「二時限目がはじまるなり」

「授業を始める前に織斑、お前のISだが準備に時間がかかる」

「はい？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園の方で専用機をよついでるようだ」

「????？」

「夏がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。」

「専用機！？この時期に!？」

「いいなあー…私も早く専用機欲しいなあ」

まったく意味がわからないという顔していると、見るに堪えかねたという感じで織斑先生がため息混じりにつぶやく

「三月、説明してやれ」

「あいさ、現在、国家・企業に技術提供されてるISの中心たるコア生成方は一切開示されてなく、世界にあるIS467の全てのコアは、篠ノ之博士が作った奴で、未だに束ねえ以外には、作れない状況にある。だけど、束ねえは一定数以上のコアを作るのを拒否してつから国家、企業は、振り分けたコアを使って研究・開発などしてんだ。後、アラスカ条約でコアの取引は禁止されてる。」

「つまり、そういうことだお前の場合は状況が状況のため、データ

収集の目的のため専用機が用意されることになった。わかったか？」

「なんとなく……」

なんとなくって……あいつやっぱりバカか

「あの、先生。篠ノ之さんにとって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」  
女子の1人が気まずそうに質問する。

……まあ、あの名字、そうそうないしなあ〜いつかはれるか。  
篠ノ之束。ISの産みの親であり稀代の天才。千冬ねえの同級生で、  
篝の姉であり俺の姉でもあるんだけどな  
ずっと一緒にいたけど、なんというか『天才』というより『天災』  
だ……

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。後、三月はあいつの弟だ。」  
ちよつとー千冬さん個人情報ばらさないでくださいよー!!  
「ええええーっ！うちのクラスに有名人の身内が三人も!!」  
「あれ?でも、三月君って?」

あああーやっぱりそこいきますよね〜  
はあー

「ねえねえっ、三月君なんで名字違うの?」  
「篠ノ之さん、篠ノ之博士ってどんな人!?」  
などなど

俺と篝が質問責めにあっている

(ああ〜うるせえーな、篝は……やっべえっ爆発するぞ!)

「あの人は、関係ない!」

突然の大声で篝と俺に群がっていた女子は、何が起こったのかわからない様子だった。

「……大声をだしてすまない。だが、私はあの人じゃない。」

そういつて、窓の外に顔をむけてしまった。

「さっさと席に戻れ、馬鹿者ども」

織斑先生がしめ、女子は席に戻っていった。

（そっぴや、束さんのネタだめだっけ…さっきも殴られたしな…）

「山田先生、授業を」

「はっはい！」

山田先生も気になっているみたいだが、そこは、プロしっかり始めた。

（はぁー休み時間も質問責めかな）

そっおもいながら、俺はノートをとり始めた。

### 三話 食事にて（前書き）

誤字、ズルジがおおいですが、あまり気になさらないでください。

### 三話 食事にて

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていませんかったでしょうけど」

対戦？なんのことだ？

休み時間、俺が一夏と話していると、たてまきロールの女生徒が腰にてを当ててそう言った。

それより、今どきたてまきロールって…

「なあ、一夏。この無駄にうざそうなやつ誰？」

「ああ、こいつは…」

「わたくしはセシリア・オルコット、イギリス代表候補生ですわ。ご存じ無くて？」

「知るか、イギリスには何度かいったことはあるが聞いたことがねえ」

「知鷓、いろんなところ行ってたもんな。」

「ああ、束ねえに連れてかれたりで…確かイギリスには、第三世代の技術提供しにいったんだよな…」

「なんか、大変だな…」

ああ、確かに大変だった…

あの人のせいでどんだけ苦労したことが…

「わたくしの存在を忘れてもらっては」

「ああ、うざい。どっか行ってくんない？つーかたてまきロールっていつの時代だよ」

「……侮辱していますの？」

「そう聞こえたんならそうなんじゃないか？」

というときなり机（一夏の）を叩くと

「決闘ですわ!!」  
本当いつの人だよ、頭にきたらすぐ決闘って…  
「やめとくよ」  
「なっ!? 怖じけついたのでしょ?」  
「いや、ただたんに加減できるか解んないし

“ 殺しちまう ”

かもしんないしな」  
と平然というと一夏やセシリア、まわりで聞き耳を立てていた女子も息をのんでいた  
「それはどういう」

キーンコーンカーンコーン

セシリアの話を遮ったのは三時間目開始のチャイムだった「また後できますわ!! 逃げないことね!! いいですわね!!」  
「こなくていいよ…」  
「お前も大変だな…」  
「なんだ一夏もか…」  
「ああその話は、また後でな…」  
と言いつつ何故に合掌している

パァンッ!

「とつとと席につけ、三月」  
「はい…」

俺って叩かれキャラか?

午前の授業もおわり

「知鶴、飯食いにいこうぜ」

「おう、篝も誘おうぜ」

「そだな」

フオローは大切だよな。それに一夏を連れていけば機嫌も治ると思  
うし。

「篝」

「……………」

ありゃ？無視？

「篠ノ之さん、飯食いにいこうぜ」

「……………私は、いい」

「まあそういうな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おい。私は行かないと　う、腕を組むなっ！と、知鶴何と  
かしらっ！」

「無理」

ははは、見てて面白いし、篝は一夏みたいに強引にされると正解な  
んだよね

「なんだよ歩きたくないのか？抱っこしてやるうか？」

「なっ！／＼／＼／＼／＼」

一夏は流石は俺といったように頷いている

一夏…

誰でも赤くなるぞそれは…

「は、離せっ！！」

「学食ついたらな」

「い、今離せ！この、ええいっ！」

箒の腕に絡ませていた一夏の腕が、肘を中心に曲げられた。

次の瞬間一夏が俺の方に飛んできた

「よつと、一夏大丈夫か？」

「ああ、サンキュー」

と俺は、一夏を抱き止めていると

「お姫様抱っこ……」

「えっ！織斑君と三月君ってそういう関係!？」

「織斑×三月：良いわね!」

うわぁーなんか変なことになってるなぁー

少しからかうか

と俺は一夏の頬に手を置き、顔を近づけると

「一夏、怪我はない？」

「ああ…大丈夫…お前こそ大丈夫かいろいろと…」

と少しからかってやると

「ちよつ、ちよつと大丈夫!？」

「鼻血でてるよ!」

「………死んだおばあちゃんがみえる……」

なんかすごいことになってるなぁー……

死んだおばあちゃんとかあぶないだろ……

などと思いつつ一夏をおろして箒のそばに行つて腕をつかんで

「一夏行くぞ」

「おう」

箒は腕をほどこうとしながら

「は、離せ！いい加減に」

「いいから黙ってついてこい、じゃないと空いてる方に一夏をつけるぞ?」

「む………」

俺がそう言つと、箒はされるがままついてきた。

はい、学食到着。混んでっけど、大丈夫か。

「一夏、日替わり三枚」

「おう」

というところだったと言わんばかり食券売り場の方に一夏は走って行った

「おい、私にも好みがある」

「鯖の塩焼き定食だつて」

「私の話を聞いているのか！」

「聞いてないよ、折角3人で食べようと思ったのにさ、それに一夏は箸の心配もしてる様だつたぞ」

「わ、私は別に……」

「はあー、一夏が呼んでるようだから行くぞ」

「……」

箸の腕を掴んだまま一夏の方にいき食券をもらい、カウンターまでいきカウンターに食券を置いた。さっきから右手しか使えないからすげえ不便だ。

「日替わり3つお待ち」

「ありがとう、あばちゃん。おお、うまそうだ」

「確かにうまそうだ」

「うまそうじゃないんだよ、うまいんだよ」

といい食堂のおばあちゃんはにかつとわらった。いい人そうだ。

「あっちの方空いてる」

流石に箸も逃亡しまいと思い、手を離し日替わり定食の乗ったトレイをもって席に向かった

箸と一夏は追ってきて、空いていたテーブルにつく

「そっぴやさ、箸」

「……」

味噌汁に口付けながら返事している。一夏も鯖の身をほぐしながら

続ける。

「ISのこと教えてくれないか？このままじゃ来週の勝負何もできずに負けそうだ」

「なんだ？勝負？」

「くだらない挑発に乗るからだ」

誰の挑発に乗ったんだ、一夏は…

「なあ筭ねえ、一夏戦うのか？」

「あ、ああ知鷗が来る前にクラス代表をかけて、イギリス代表候補生と勝負することになったんだこの馬鹿は・・・後、筭ねえは止めてくれ恥ずかしいノノ」

「了解、善処する。それにしてもこの馬鹿は」

「うっ返す言葉もない」

と一夏は気まずそうにしていると

「ねえ。君たちって噂のコでしょ？」

いきなり、隣から女子に話しかけられる。見ると、三年生のようだった。確か各学年リボンの色が違うんだよな。

癖毛なのかやや外側に跳ねた髪が特徴的で、どこかリスを思わせる人なつつこい顔立ちをしている。

「はあ、たぶん」

「たぶん、っーかどんな噂になっただよ」

俺やが返事をする、先輩は自然な動きで隣の席にかけた。組んだ腕をテーブルに乗せ、若干傾けた顔を俺に向けてくる。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」「はい、そうですけど」

「俺は、違いますけど」

俺はやらない筈だけど

「そうなの？でも、代表候補生と男子2人が戦うって聞いたけど」  
What?初耳ですけど？

「ても君たち、素人だよな？IS稼働時間いくつくらい？」

「いくつって……二十分くらいだと思いますけど」

「一夏少ないな…俺は二、三万時間くらいやったけど」

「…二万!」「」

「小さくくらいからやってんだそれぐらいいくだろ」

まあ束ねえに無理やりつきあわせられてたからなあ

「えつとき、君がよければ私が教えてあげよっか？ISについて」と三年生の先輩が一夏にいう

まあ、俺がやるよりはいいか。

面倒だし…

「はい、ぜ」

「結構です。私たちが教えることになっていきますので  
筹ねえ私たちって何？もしかして俺？」

「あなたたちも1年でしょ？私の方がうまく教えられると思うなあ」

「………私たちは、篠ノ之束の妹と弟ですから」

これだけは、いいたくなさそうにいう

「篠ノ之つて ええ!？」

先輩は物凄く驚いた。そりゃあ、IS作った人の妹と弟が目の前にいたらなあー

「ですので、結構です。」

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

と言い先輩は軽く引いた感じに行ってしまった

「教えてくれるのか？」

「そう言ってるんだ」

はあ、最初からそう言っただけ言えればいいのに……

「放課後」

「ん？」

「剣道場にこい。一度、腕が鈍ってないか見てやる」

「いや、俺は」

「見てやる」

「……………わかったよ」

「そっぴや俺等のまわり強情なやつ多いな」

「まあ、頑張れ一夏」

「お、おい！」

「知鷓お前もだ」

「わかったよ……」

「はあー面倒くせ」

「と思いつつお茶を飲む」

三話 食事にて（後書き）

感想があればお願いします。

#### 四話 予感と不安（前書き）

オリ話かくのなれていないので気になさらないでください。

## 四話 予感と不安

放課後 剣道場

パシーン！

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

まあ確かに開始してから十分。一夏の一本負け。昔は、もう少し良かったんだけどなあー

「……………中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

おお〜馬鹿はなんとやらか？

「  
なおす」

「はい？」

「鍛え直す！私が毎日稽古をつけてやる！」

「いや、俺はISのことをだな」「だからそれ以前の問題だといっている！」

すっごい怒ってるなあ。そんなに許せなかったんだな。一夏が弱く

なつてたの

「箒ねえ、少し落ち着いて」

「知鶴 お前も腕が落ちているんじゃないだろうな？」

箒は、軽く睨むようにみてきた

いや、そんなならまれても…

「それじゃ、軽くやる稽古」

「ああ、防具は？」

「いらない」

といい竹刀を持ち二度、三度振り

「よしやるつか、箒ねえ」

「わかった」

2人とも竹刀を構え打ちあい

それから五分後…

「はっ！」

「っ！！」

知鶴の竹刀が箒の首の前に出された

「私の敗けた、相変わらず強いな」

「はは、箒ねえも強いよ前よりも腕あげたね」

「さて、一夏」

「お、おうなんだ？」

「明日からしつかり稽古つけてもらえ」

「ああ・・・って知鶴は？」

「俺は、ウサギさんに頼まれもんをやんなきゃなんないから  
まあー嘘半分だけど

「大変そうだな…」

「まあーな」

といい箒の方へ行き

箒の耳元で

「頑張れよ、一夏と一緒に」

「なっ！？／＼／＼／」

わぁ、顔真っ赤

「じゃあな一夏また明日」

「おう」

といい剣道場を出た

門に向かって歩いてしていると後ろから聞き覚えのある声が聞こえた

「三月君待って下さい！！」

ん？この声はたしか…

立ち止まって振り替えると

「はぁー、はぁー、はぁー」

我がクラスの副担任山田先生がいた

「大丈夫ですか？」

「は、はい…大丈夫です」

大丈夫か…？

かなり息あげてるけど

「えーと、どうかしたんですか？」

「えっとですね、三月君の部屋が決まったのでお知らせに、それで

これが部屋の鍵です」

と山田先生から鍵をわたされた

これのためにここまで

「あ、ありがとうございます」

「いえ、私は会議があるので」

「はい、ありがとうございます」

というとき山田先生はニコツと笑い走って行ってしまった  
さて山田先生が折角届けてくれたんだ、行かないとな…

……寮って女子寮だよな

と少し不安を覚え寮の方へとむかった

「1013号室は…ここか」

と山田先生からわたされた鍵の部屋の前に来た

「一応、ノックすしとくか」

誰かいても困るしな

コンッコンッ

「はあ〜い」

ん？この間ののびた声何処かで…  
ガチャッ

「どちらさまですか〜？」

「つて、お前かっ！！」

「ふえっ〜!!？」

扉を開けて出てきたのは、物凄く眠そうにしている女の子だった

「わー。ともともだー」

「いい加減、その言い方やめれ本音」

はあーとため息をつき頭に手をやって少ししずむと

「どうかしたの〜？」

「まさか、ルームメイトがお前とは…」  
「ええ〜!?!」

と本音は大声で叫ぶ

「とりあえず、中にはいれてくれ」

「はい」

なんとまあ〜きのぬける返事だこと  
でと思いつつ部屋の中に入った。

「まさか、本音がいるとはな」

「あはは〜、私もびつくりだよ〜朝、転校生が入って来たと思った  
らともななんだもん〜」

「って、同じくクラス!?!」

「そだよ〜」

確かにいたようなきも…

「でね、その事いつたらね〜連れてきてって言われたから明日の放  
課後、生徒会室へゴ〜」

「何故に生徒会室へ?」

「会長に頼まれたから〜」

会長、まさかな…

「わかったよ、俺は寝るから」

「もお〜?」

「眠いんだよ、疲れたし」

確かに疲れた、運動不足かな?

「どっちのベット使えばいい?」

「じゃ〜窓側で〜」

「了解」

といい窓側のベットに横たわって寝始めた

本音視点

知鷓が寝始めてから数分後

「いや〜懐かしいな〜寝顔みるの〜」

つんつん

と知鷓の頬っぺをつつく

「ん…すー…すー」

「あはは〜可愛い〜」

私も寝よ〜見てたら眠くなっただし〜

と自分のベットに潜り寝始めた

そして翌日の放課後

「知鷓、道場のほう行こうぜ」

といい一夏がやってきた

「わりい、この後予定入ってたんだ」

「わあ〜おりむ〜だ、ともとも〜かりてきま〜す」

「ん？ああ、のほほんさんか、知鷓知り合いだったのか？」

「まあーな、つーわけで頑張れよ」

「ああ」

と一夏にいい本音と一緒に教室をでた

それからしばらくして

生徒会と書かれたプレートの前の部屋についた

「失礼しま〜す」

「失礼します」

といい扉を開けた所で回れ右をして立ち去ろうとしたところ、後ろからのびた手が知鷓を捕まえ生徒会室の中に引きずりこんだ

「んふふ、いきなり帰ろうとはね」

「いや、会いたくない人」

「ほほう、誰のことかな知鶴くん？」

「俺の真後ろにいますよ、楯無さん」

と後ろにいる人 更識楯無に言う

「はあー、本音がいたからまさかとは思ったが…っーか離してくだ  
さい」

「あん、逃げるからダメ」

「逃げませんよ、はあー」

たく、この人は…

と思っていると楯無は離れた

「やあそれにしてもしぶりにだね、知鶴くん」

「ですね、俺としては会いたくなかったですけど」

「やっぱりあの日のことかな？」

「……………」

あの日…か忘れようとしてたのにな

殺しかけたあの日のことを

そんなふうにいると楯無はニコニコしながら近づき抱き締めた

「ちよっ、止めてくださいよ！！／＼／＼／＼／＼」

「やん、えっち動かない大人しくしてる」

「頭、撫でるな！」

「んふふ」

聞いてないし…

本音何とかしてくれ…  
とアイコンタクトしてみたが

(頑張って)

(薄情者!)

と返していると

「会長そろそろやめては」

「そうね、また後でしましょう」

「するな!!」

とからかいながらも解放してくれた。

はあくまったくこの人は…

「助かりました、虚さん」

「いえ、かわいい弟のためですから」

「弟じゃないですから!」

はあく虚さんは虚さんで…

先程助けてくれた女性 布仏 虚。

何故か俺のことを弟と認識している、頼りなる優しいお姉さん的な人です。

「で、用件はなんですか?」

「話のはやくて助かるわ。それでこそ知鶴くんね」

「さっさとしてください、帰りますよ」

「やん、待つて。知鶴くんには、生徒会に入って貰いたいの」

「全力でお断りします」

誰がやるかんな面倒なこと  
と思っていると

「そういうと思ってたわ。虚ちゃんやっちゃえ」

「はい」

「うわっ!? 楯無さん! それ卑怯ですよ!」  
と言いながら虚から逃げ回っている

「これもひとつの作戦よ」

その二分後…

「うふふ」

「……………」

今の現状を整理しよう

生徒会への参加を断り虚さんに捕まり頼ずりをされている

「さてさて、虚ちゃんを離してあげても良いけど…」

「その代わり生徒会に入れ、でしょ？」

「そういうこと」

といわれ本音の方を見ると

「わくわく」

と何やらきたいしているようで、はぁーとため息をつき

「わかったよ、入ればいいんだろ入れば…」

「うん」

「やったあ」

「それでこそ私の弟君」「はぁ、たるいことになったな…」

「では、生徒会の内容を説明します」

と虚が生徒会の仕事についての説明を受けた

それから30分

「わかった？」

と本音が聞いてくる

「まぁーなんとか」

えつと整理すると

・必ず一回は生徒会室へ顔をだす

・その月によってやることは説明される  
など

「えっと、もう帰っていいか？」  
「なら〜一緒に帰ろう〜」  
「そうね、今日は解散しましょうか」  
「はい」  
と言い各自解散した

「はあ〜、なんでこんなことに」  
「あはは〜、どんまい〜」  
「あの人にかかわるとろくなことないんだよな…」  
「女装させられたり、コスプレさせられたり…」  
「確かにね〜」と他愛ない話をしながら歩いていると訓練帰りの夏たちに遭遇した

「よう一夏、今帰りか？」  
「ああ…」  
「なんか疲れてるな…」  
「まああな…」

と一夏がため息をつく  
「しかつりやらないから疲れるのだ」  
「やつてるって…」

「だいたい一夏お前はな」  
「…」  
「篝ねえ、ストップ。はやく帰ろうよ」  
「話長くなりそうだし…」  
「言ったら怒られそうだな…」

「そうだな…」  
と言うと先に行ってしまった  
「サンキューな、知鶴」  
「いや、なんか長くなりそうだったし」  
「じゃあ、先行くは。遅いと何か言われそいだしな」  
「そうか」

と言うと駆け足で行ってしまった

「うう」

「どうした？本音？」

「私なんか忘れられてる感じだったよ」

「あー、えーと、悪い…」

忘れてた…いたの…

「俺たちもはやく帰ろうぜ」

「そだね」

と本音と話ながら寮へと歩いた

試合当日

「はあ」

「どうしたんだよ」

「なんで俺もやんなきゃなんねえーんだよ」

「成り行きじゃね？」

「はあ」

もうため息しかでねえよ…

「三月、織斑の機体がまだ来ていない。お前から先にやれ」

「了解…はあ」

たく、面倒だな…

と思いつつ千冬をすれ違い様に肩をつかまれ

「殺すなよ」

「殺りませんよ…たぶん」

「はあ、まったく。ほらさっさと行け」

と背中を叩かれ

「はいはい」

と言い持っていた赤いビー玉みたいな物を握り

「さあ〜行くか、“ブレイカー”」

と言うとビー玉みたいな物が光り知鷲をつつむと  
中世の騎士みたいな鎧を纏い天使のような翼が生えていた。その腰  
には、鞘が吊るされていた

「久しぶりの展開だな、いつてくる一夏、筭ねえ」

「ああ、勝つてこいよ」

「負けるなよ」

「それは、そつくり一夏お前に返しとく」

俺は、負けないけど一夏は…どうだろ？

「さあ〜と待たせるのも悪いし行くか」

といいアリーナへとむかった

## 五話 試合（前書き）

一夏とセシリアの戦闘は、省いてしまいました…  
戦闘シーン書くの苦手で…

## 五話 試合

「よく逃げずに来ましたわね」  
「逃げる必要ないからな」

セシリアは鮮やかな青色の機体フル・ティアリスを装備していた。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、その手には二メートルをこす長大な銃器 六七口径特殊レーザーライフル>>スターライトmk?<<が握られていた。

どう見ても狙撃タイプか、なら好都合。

「最後のチャンスをおげますわ」

腰に当てた手を俺の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けてくる。

「チャンスって?」

「私が勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふなら、許してあげないこともなくつてよ」

カチーン

「ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ、んなもんチャンスつていわねよ」

「そう…残念ですわ。それなら」

警告、敵IS…

「お別れですわね!!」

キュインツ！何度も聞いた独特な音。それを右によけかわした  
「なっ!?!」

セシリアは、初撃をかわされたことに驚いたようだがすぐに切り替え  
「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・  
ティアーズの奏でる円舞曲で！」  
「あいにくとダンスは嫌いだね」  
「そうですか？それは、意外ですわね」  
「意外って…」  
と言ひ合いながらもセシリアの攻撃をかわしている

「 十三分。ダメージを与えられないとわ…」  
「弾除けは得意なんでね、そろそろ終わらせるか」  
と言つと大剣アイナと  
「無限、雷斬」  
というなり電気を帯びた刀を抜いた  
「いくよ」  
と言つと瞬時加速で接近しビットを一機破壊した

「はぁぁ…すごいですねえ、三月くん」  
ビットでリアルタイムモニターをみていた山田先生がため息混じり  
に呟く  
しかし、千冬は対照的に忌々しげな顔をする  
「あの馬鹿者。遊んでいるな」  
「えっ？どうしてわかるんですか？」  
「見れば解る、さっきまで武器を出していなかっただろ」  
「たしかに…」  
と苦笑いしつつ言つと  
「なぁ、千冬姉さっき」

パアッン！

「織斑先生だとなんと言えれば解る、でなんだ」

「さつき知鶴に言つてたことなんだけどさ。“殺すなよ”ってどういふ…」

千冬は、嫌そうな顔をしてため息をつく

「あいつは前に一人殺したことがあるんだ」

と千冬が言つとその場にいた山田先生、一夏、箒は啞然としている。いち早く我に帰つた箒が

「織斑先生、それはいつたい…」

「あいつは、ISが嫌いな操縦者と試合をした。だが、それはあいつの一方的な試合になり相手の手足には刀や剣が突き刺り、それでもシールドエネルギーがつきておらず試合が続いた。」

「それでどうなったんだよ」

と一夏がさらにきくと

「相手の操縦者は、三月の攻撃に死の恐怖を感じて逃げ惑い最後に三月が腰につけている剣で止めをさした。だがその操縦者は、あいつに『ありがとう』と言つたそうだ。その後、その操縦者は精神崩壊をおこし精神が死んだらしい」

「そんな…」

と箒がつぶやき千冬が頭に手をやりながら

「だから、念のためあいつに殺すなよと言つたんだ。あの馬鹿がまた泣かないよにするためにな」

と小さな声で呟いたが、近くにいた一夏がきいており

「それはどうゆう」

「試合が終わるぞ」

と千冬が一夏の言葉を遮り、一夏はモニターを見る

「さてともう終わりにするか」

「はあー…はあー…」

セシリアは息をあげ、かなり疲れているようだ

知鶴が武器を出してから五分。

知鶴はセシリアの攻撃をかわしながらダメージを与えていった

「最後は、最強のツルギで終わらせよう」

とにこやかに言い腰の剣に手をかけ一瞬のうちに間合いを縮め剣を抜きながらセシリアを斬った

『試合終了。勝者 三月・V・知鶴』

「お強いですわね。」

「ん？」

試合が終わり、シールドエネルギーの回復のため戻ってきていたセシリアが話かけてきた

「なぜ、そんなに強いんですか」

「強くないさ、俺なんて。俺より一夏の方が強いさ。いろんな意味でな」

「あの野蛮な方がですか!？」

まあ、驚くわなでも…

「戦えば解るさ。じゃあな」と手をふりながらその場をあとにした

「……………なにこの空気？」

重い……お通夜か？お通夜なのか？モニタールームはまるで誰かが亡くなったかのような空気になっていた

「知鶴」

「なに？筭ねえ」

「お前は、人を殺めたことがあるのか？」

「は？」

「だから人を殺したことがあるのかと聞いている！！」  
まさか……

と思い、千冬を見るとすまないと云った顔をしている

「はぁー、もしかして精神崩壊したひとのこと？」

「そつだ」

「織斑先生……あいつ元気に過ごしてますよ」

「なに？どついうことだ」

と千冬は驚いたように目を見開いて言つと

まあ、驚くわな。あそこにいた一人だし

「定期的にカウンセリングするよう頼まれて、話しをしにいくうちに少しずつ良くなって今じゃ元気過ぎるくらいですよ。ほらこれあいつが一緒に写メ撮ろつて言われてとつたやつ」

とにこやかに言いながら持っていたケータイから写メをみせた  
そこには、元気で活発そうな女の子と恥ずかしそうにしている知鶴  
が写っていた

「たしかにあの時の」

「でしょ。それより一夏の試合始まりますよ」

と知鶴が言っていると両者アリーナに出ていた

その後の一夏の試合は、一夏の負けに終わった。敗因は、武器の特性を把握していなかったためにシールドエネルギーが0になり負け  
一夏との試合が終わったセシリアは、ピットに戻らずなにやら一夏  
にきずかれない感じに熱い視線をおくっていた

## 五話 試合（後書き）

感想をおまちしております

## 六話 夢とクラス代表（前書き）

誤字等があるかも知れませんが気にしないでください

## 六話 夢とクラス代表

「よう、一夏お疲れ」

「ああ……」

「織斑先生がよんでるぞ」

「まじか……」

「まじ」

一夏は、ため息つくと歩きだした

「俺も行くよ」

「ああ、サンキュー」

「面白そうだからな」

「そっちが本音か!？」

「まあーな」

だって面白そうだし

と思いつつ歩きモニタールームにつくと

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

おー、一夏のランクが馬鹿者から大馬鹿者にながって…

さすが千冬さん

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかつただろう。明日から訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……………はい」

「それと」

お、千冬さんどうしたんだろ  
と思ったら

バシン!

「いった！？いきなりなんですか！」

「おまえはさつさと剣をしまえ」

と言いながら腰の剣を見てくる

「これが待機状態なんですからしょうがないじゃないですか」

「なに？」

「だから、この剣が俺のIS待機状態です」

なんか知らないけど、普通はアクセサリーになるのが武器なんだよね…

「そうか、ならいい。」

いいんだ…

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

まあ、帰ってねますか

「帰るぞ」

「そうだな」

寮への道のりを歩いた

「ともとも」

「ん？本音か、なんかようか」

「えつとね、これ渡してつてたのまれたんだよ」

と本音から箱を渡された

「先にいくぞ」

「あ、ああ。そうして箒ねえ」

「わかった。いくぞ負け犬」

うわあ、ひでえーな箒ねえ…

一夏、なんかダメージくらってるし

「で、本音。誰からだこれ」

「会長から」

「なんか嫌な予感が…」

「あはは…」

開けたら爆発するんじゃないのか…

「開けてみよう…」

「わくわく〜」

ぱか

開けると中には

「シュークリーム…」

「わあ、美味しそうだね〜」

「じゃあ食べるか」

「うん」

ぜってえなんか入ってるからな…

本音、悪い

「ほら、あ〜ん」

「あ〜ん」

パク

「!?!?!?!?!」

「やつぱりか…。大丈夫か本音」

「ひははひらお〜。(訳：したがいたいよ〜)」

と半泣き状態で舌をだしている

「辛子とかいろんなもん入ってるな」

あの人は何がしたいんだ…

「ひず、ひず〜(訳：水、みず〜)」

「わかった、わかった。ほら」

「あひはほ〜(ありがと〜)」

渡した飲み物を飲み干すと

「ふ〜。死ぬかと思っただよ〜」

「死なねえよ」

さてとどうすっかなこれ

と思いつつ寮へ戻りそのまま寝てしまった

「ここは、どこだ？」

あたりを見回してめ森が広がっていた

「たしか、部屋にいたはずなんだが…っかなんで小さくなってんだ？」

知鶴の体は六歳ぐらいの子どもの伸長になっていた

はあー、夢かな

と思っっていると

「お、ここにいたのか。探したぞ」

「え？」

声が出た方を見ると今の自分と同じくらいの年の魔女のような格好をした女の子がいた

「君は？」

「なに寝ぼけたこと言ってんだ。ほら、霊夢もまってるぞ」

「霊夢？」

なんだなんか懐かしい名前だな。初めて聞くのに…何故だ？

「おいおい、本当寝ぼけてんのか？」

「たぶんな、で名前は？」

「俺は魔理沙だよ。どっかで頭でもぶつけたのか、汐音」

魔理沙、汐音これまた懐かしい名前…はて何故だ？

「本当、大丈夫か？」

「大丈夫だよ魔理沙」

「そうかならはい行くこうぜ」

「わかった」

と言つと魔理沙は箒にまたがりとんだ

「おいおい飛び方まで忘れちゃったのか？」

「ああ…」

というかまったく知らないんだけどな

「お前いわく飛ぶイメージらしいぞ」

「そーなのかー」

「あはは、ルーミアのまねか」

ルーミア…まだまだ初めて聞くはずなのになんで懐かしいと感じるん

だ？

「それよりはやくしろよ」

「わかった」

飛ぶイメージ…

ISで飛ぶのと同じか

「お、なんだできんじゃねえか」

「みただな」

「ほら行こうぜ。霊夢怒ってるぜ」

「そうだな」

と二人で少し飛ぶと

「遅い！二人とも！！」

と巫女のような格好をした女の子がいた

「わりいな、霊夢。汐音が壊れててな」

「そう、なら魔理沙少し離れてて」

「は？」

と霊夢が魔理沙に言うなり袖から何かカードを取り出すと

「ちよ、霊夢まてって」

「問答無用！霊符『夢想封印』」

大量の弾が知鷓目掛けて飛んできた

「うわぁ！！」

知鷓は避けることもできず当たってしまった

「お、おい霊夢やりすぎだろ！」

「いつもならよけられると…」

いつもよけてたのか…

とそこで意識がとぎれた

「朝か…」

目が覚めると六時を回ったところだった

「あれは、夢だったのか？」

「やたら懐かしい感じがしたけどいったい…」

「まあーいつか、飯食って行くか」

と思いつき替えをして食堂で朝食をとりクラスへと向かった

その途中で慌てたように食堂に向かう本音と出会ったがスルーした

そして朝のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっていた。

「先生、質問です」

「お、一夏が拳手したぞ」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「たしかにそうだな、なんで一夏なんだ？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

「そーなのか？ やりたがってたってきいてたのに何故？」

「わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。」

「ちよつと、待った。知鷗は！」

「おい、一夏ふるなよめんどくせ〜な」

「一夏、俺は個人的に試合したんだ。クラス代表を賭けてやったわ」

けでもないしな。そうだろ、オルコットさん？」

「ええ、そうですわ」

「ということだ、まあ頑張れ」

まあ、違ったとしても辞退して一夏譲るけどな。面倒だし。

「いやあ、セシリアに知鶴くんわかってるね！」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。でも知鶴くんのは売れなくなったけど」

商売すんなよな人の情報で

「そ、それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を」

バン！

机を叩く音が響く。

立ち上がったのは箒だった

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

“私が”ってとこ強調したな

独り占めしたいのか？

というよりいい加減静かにしないと…

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いていきセシリアと箒の頭を叩いた千冬さんが低い声でつけた

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと（一夏以外）クラス一丸となって返事をした。

一夏、頑張れ

と心の中で合掌をしながら思った

## 追加 機体（前書き）

次回から出す予定の機体とシステム

前に一巻分では一機しか出さないと書きましたが出すことにしました

## 追加 機体

IS名：コロ

万能型

装備

スナイパーライフル しば

大型拳銃（黒） 黒猫

大型拳銃（白） 白猫

シールドビット×4 タマ

アサルビット×4 ポチ

ソードビット×4 不知火

刀 犬丸

剣 猫丸

ワンオフ

今のとこなし

機体説明

武器はオリ主が製作し、IS、IS名、武器名は束が考えつけました。

オリ主はこの機体をあまり使いたがりません。展開すると機体とパイロットのシンクロ率をあげ操縦をさらに楽にするようにパイロットの体にナノマシンが入ります。そうすると耳、しっぽ（狼）がはえます。機体を解除しても一晩は残ります…

## ハーツシステム

パイロットの強い感情を読み取りそのパイロットの機体を形造ります。でもパイロットはその強い感情にのみこまれてしまう可能性があります。もともとは、束とオリ主が人の感情により形状、武装、性能が変わる機体を作ろうと考え作り出されたシステムがハーツシステムです。

という設定です

## 七話 飛行と狼（前書き）

かなり遅くなりましたが、次話投稿です。

## 七話 飛行と狼

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、三月。試しに飛んでみせる」

「了解」

はあー、今日は展開したくないんだよなあ…

もたつくと殺られそうだしな

(来い、コロ)

そう心のなかで呼ぶと。ISが展開した

「っっっっ」

なんか前にもこんなこと…

「っっっっっっっっっっっっっっっっ」

うるせー、またかよ！

「前と形がちがう!?!」

「耳としっぽがはえてる!」

「ああ、あのしっぽでもふもふしたい!?!」

皆さん好き勝手言ってるなあ  
でもそろそろ…

「静かにしろ、馬鹿者ども」

しーん

「はあ、まったく。で、三月なんだその機体は?」

「こいつはコロです。」

「ふざけているのか?」

そうですねー

「この機体の名前、武装名、外形はうさぎさんがやったんで」  
「なるほど、ほかの機体は」

「ブレイカーと他二機はうさぎさんのところで他は解体して新しいやつのために使ってます」

だからこいつしか残ってないんだよね…

「そうか。それで、織斑まだ展開できないのか？いつまでかかっている」

ありやまだできてなかったのか

と一夏の方を見ると右腕を突き出してガントレットを左手で掴んでいた。その一秒後一夏のIS白式が展開された

「よし、飛べ」

と言われセシリアと俺はほぼ同時に飛翔した。その後、一夏も遅れて飛翔した。

「何をやっている。スペック上ブルー・ティアーズより出力では白式の方が上だぞ」

馴れてないにしても遅すぎだ  
と思いつつ後方の一夏を見た

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そういわれてもなあ。知鶴はどうやってんだ？」

「俺か？俺はもう慣れで飛んでるけど、最初は鳥をイメージした」

「鳥？」

「ああ、飛んでる鳥をじぶんを重ねてた」

たしか鴉だっけかさねたの？

「あの、一夏さん、よろしければ放課後指導して差し上げますわ。」

そのときは二人きりで

「一夏、知鶴っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」  
耳いてえ、箒ねえどなんないでくれよ…

「織斑、オルコット、三月、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、知鶴さん、お先に」

言って、すぐさま地上に向かった。

「うまいもんだなあ」

「あれぐらいはできるだろ」

「う…自信ねえ…」

と話しているうちにセシリアはクリアーしたらしい  
さてと

「一夏先行くぞ」

「おう」

「あと…」

「？」

「地面に激突すんなよ」

と言い地上へ向かった

よしあとは、完全停止。

「よし、ぴった十センチ」

としつかり十センチの所で止まった

さて、一夏は

と上を見るとすごいスピードで突っ込んでくる一夏がいた

あのバカ激突する気か!?

「タマ、フィールド展開!!」

というとビットが四機現れ四角形のエネルギーフィールドを作った  
ギョーンツ  
ドオオンツ!!!

間一髪の所で間に合ったらしく一夏の地上激突は免れた

「馬鹿者。グラウンドに穴を開けるつもりか」

「……………すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろっ」

筈ねえのことだから擬音だったんだろうな

「貴様ら、何か失礼なこと考えているだろ」

一夏もか…

「大体、おまえたちは昔から」

筈の小言が始まったかと思ったら、それを遮るように一夏の前に影

が現れた

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。知鷗のおかげで大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

何か楽しそうに微笑むセシリア

「……ISを装備しているのだから怪我をするわけがないだろう……」

……

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識ですよ」

「お前が言うか。この猫かぶりか」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチッ

おー、火花散ってるよ。いやあー一夏もてるねえ。本人はきずいて無いけど

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端でやれ」

箒とセシリアの頭を押しつけて、一夏の前に千冬がたった

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめる」

いわれて、一夏は武器展開に入った。六秒後《雪片式型》が一夏の手に展開された

「遅い。0・五秒で出せるようになれ」

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまであげ狙撃銃《スターライトmk?》が展開された  
「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめろ。誰かを撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは」

「直せ。いいな」

「……はい」

あはは、反論さえ与えないとはさすが千冬さん

「三月、武装を展開しろ。そうだな近接、中距離武器だ」

「二種ですか？」

「そうだできるだろ」

「わかりました」

というなり腕をふり地面に近接武装の剣と刀をさし、腕を正面にむけると白と黒の二丁の銃が握られていた

「よし。セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「あ、はっ、はい」

いきなりふられたからかびっくりして反応が鈍るセシリア

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。 ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

なかばやけくそに武器名を叫んだ

「……何秒かかっている。実戦でも待つてもらおうのか」

「実戦では間合いに入らせません！」

「ほう。三月と織斑との対戦で簡単に懐に許していたようにみえたか？」

「あ、あれは、その……」

セシリアの言葉は歯切れが悪い。

『あなた方のせいですわよ！』

いきなりなんだ

『あ、あなたがたが、わたくしに飛び込んでくるから……』

そりゃ、近接使用のISだしな、いかなきゃ斬れないからな――

『せ、責任とついていたきますわ！』

あほか

ちなみに誰も通信に返事はしていない

「時間だな。今日の授業はここまでだ。三月、その耳とっばは何故残っている」

ISを解除しても消えない耳とっばに疑問をもったようで

「これは、ISの展開する時にナノマシンが体内に入りパイロットの身体機能やらIS関係のいっさいがっさいあげるさよっばで生えているんで一晩立たない消えません」

「そうか、たくあいつはなにを作っているんだ」

「俺も関わったんですけど…。でもこれ使用者によって変わるんですけどね」

「まあ、それはいいさっさとどれ」

「はい」

といいほかの生徒も解散しはじめた。アリーナから出た

## 八話 宴（前書き）

話を変えました！

なんか書く内容がめんどかったんで

一夏「そんなんでもいいのかよ、作者？」

いいんだよ、ワトソン君

というわけで誤字など気にしないで読んでください！

## 八話 宴

放課後

「一夏、練習行くか」

「おう」

一夏に声をかけアリーナへ向かおうとすると

「「一夏<sup>さん</sup>！」」

篤、セシリアコンビが一夏を呼び止めた

「どうした？」

「練習するなら、私も行くぞ」

「そうですね。わたくし」

とセシリアが何か言おうとするなり

「三月君、いますか！」

と山田先生が息をきらしながら来た

「つかさつきからなんかやたら来るな」

「えーとですね、お引越です」

はい？

「主語を入れてもう一度言ってください」

「あ、すみません。部屋の調整が付いたので、移動してください」

「だとよ一夏」

やっとかあゝ

と思っていると

「あ、三月君が一人部屋にです」

はい？今なんと？

「一人部屋が1つ用意できたので織斑先生が三月君にと」

「織斑先生が…逆らったら死、か」

「つかかなにを逆らうきなんだ俺は？」

「それじゃあ、私も手伝いますから、すぐにやっちゃいましょう」

「あいさー、でも一人でやります。機密情報とかあるんで」

後で仕事やんないとな…あっちの仕事は免除されてるからな―

「あ、そ、そうですね！三月君も年頃の男の子ですしね！」

「違いますよ！先生が創造してるものじゃありませんよ！」

と言い終わるなり肩に手が置かれた

「では、なんなのだ？」

と篤が般若の形相でにらんでいた

「篤ねえ、めっさ恐いんだけど」

「なら早く言え」

いたい、いたい、肩めっさ痛い！

「ISの設計図や試作機の稼働データ、新システムのデータとかだよ！つーかマジで痛いから離しててば！」

「そ、そうか。すまない」

と篤は申し訳なさそうにあやまった

「そ、それでは行きましようか。三月君」

「はい」

といい山田先生について教室をでた。その後、教室より一夏の悲鳴が聞こえた気がした。

それから部屋へ戻り荷物をまとめ新しい部屋で荷物を整理し終わってパソコンでデータを整理していると

コンッコンッ

「はい、あいてますよー」

と言うと篤がはいってきた

「どったの篤ねえ」

「なにかやるらしいから、食堂につれてこいと言われて、私が知鶴を呼んでくるよう言われてな」何やる気だ…

「わかったよ、少し待って後これをあの人に送れば終わりだから」

「あの人？」

「うん、あれ」

「なるほど」

と言うと篤はものすごく不機嫌なかおをした

はぁー、まだ仲悪いんだ

「よし転送完了」

「では、行くぞ」

といい篤はさっさと行ってしまった。その後を追うように部屋の戸締りをして後を追った

「というわけです！織斑君クラス代表決定おめでとー！」

「おめでとー！」

ぱん、ぱんぱん。クラッカーが乱射される。

なるほど、おめでたパーティーか

「一夏、少しは喜べば？」

「喜べるか……」

はぁーとため息をつき少し嫌そうだった

「それよりもまだきえないのか？」

「まあ、もうすぐ引つ込むだろう。さっき薬うつたし」

ちなみに薬とは耳としっぽを早く消す薬だ、うってから一時間以内には耳としっぽは消えている。

そして、もうすぐ一時間……

耳としっぽがようやく消えた

「ふうー、これで少しは安全か……」

「なにがだ？」

「狙われる心配」

「なるほど……お前はお前で苦労してんな……」

言うな一夏悲しくなるから……

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑君と三月に特別

インタビューをしにきました〜！」

おーと一同盛り上がる。

面倒だな…

それから一夏、俺、セシリアの順でインタビューを受け写真を撮った  
そして、写真に全員が入ったせいかわセシリアがなにやら怒っている

まあ、本当は一夏とツーショットがよかったんだろうな〜

ともあれ、このパーティーは10時過ぎまで続いた。

皆騒ぎすぎ、なんか疲れた…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6201v/>

---

IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; ~ 時ヲ越エテ ~

2011年10月9日12時53分発行